

第79回 医師が 患者になって 見えた事

勤務医として大過なく過ごした後、63歳で突然の大病が襲った。新型コロナウイルス感染症の第5波が収まりつつある2021年9月末、小さな健康上のトラブルが予兆だった。

尻や手足などに末梢神経麻痺が

松下は循環器内科を専門に据え、急性心筋梗塞や狭心症の患者を得意のカテーテル治療で救ってきた。長年総合病院に勤め、50歳を過ぎても月数回の当直をこなしてきた。60歳で、人工透析と内科診療を中心とする現在のクリニックに移り、外来や透析管理など、週5日働いていた。

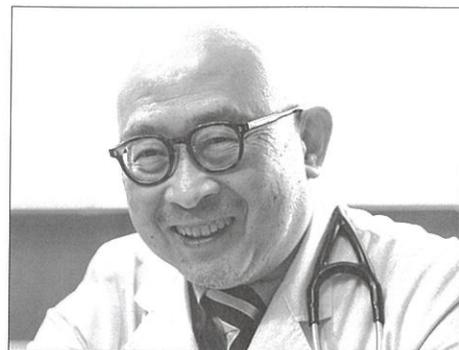
その日の朝、排便を済ませると、温水洗浄便座のノズルが当たる部位が分かりにくいと感じた。トイレットペーパーで拭いたのは、自分の尻でないように思えた。落ち着いて触診して

みると、肛門周囲に同心円状に知覚麻痺があった。

原因は定かでないが、神経の異常のようであり、便意や尿意が分からなくなったら困るなど、漠然と不安を覚えた。

翌日、異変は広がっていた。両手の指先だけが左右対称に痺れてきた。痺れは指だけでなく、手全体に及んでいった。松下は愛飲家で、ワインを中心に毎日の飲酒を欠かさない。神経内科は専門外だが、アルコール性のビタミンB₁欠乏症が生じ、ポリニューロパシー（左右対称の末梢神経障害）を起こしていると自己診断し、そこから厳格に禁酒を実行することにした。

50代半ばに差しかかる頃から、職場の健康診断で、血圧、コレステロール、そして尿酸値が高いと指摘されるようになった。それぞれ対症薬を勤務先で処方してもらい服用して



松下 豊顕(まつした・とよあき)
1958年和歌山県生まれ。83年名古屋市立大学医学部卒業、同第1内科入局。国立療養所恵那病院、愛知県立循環器呼吸器病センター、総合大雄会病院などを経て、2018年から現職。

医療法人いつき会
内科医師
松下 豊顕 / 上

いた。メタボ気味の体型も気がかりだったため一念発起し、禁酒だけでなく糖質制限も行うことにした。たばこは、40歳までは日に10本程吸っていたが、禁煙して久しい。

飲酒や食事を制限して1週間が経ったが、異常はむしろ進行していた。痺れは、手だけでなく足先にも広がった。加えて、ただならぬ倦怠感に襲われた。岐阜市の自宅からクリニックまではマイ

カーで通勤だ。座ったままの運転に支障はなかったが、職場で歩き回り、外来で患者と話すことが、つらいと感じた。午前だけで20人以上の患者と向き合う。休み休み患者を診察室に呼び入れ、何とかその週を過ごしたが、悪化しているのは明白だった。

なお神経疾患を疑いつつも、週末に休養すれば、月曜からは元に戻るだろうと楽観視する

思いもあった。その土日は終日在宅して安静を保って過ごしたが、月曜になると倦怠感が増していた。

観念し、クリニックで採血した。火曜に結果が出ると、貧血が進行し、血小板は大幅に減少していた。炎症反応のCRP値も5を超え、細胞が傷害されたこと示すLDH(乳酸脱水素酵素)の値も1300と異常に跳ね上がっていた。「末梢の神経だけでなく、全身に何らかの異変が起こっているようだ。全身性の自己免疫疾患である膠原病、あるいは血液疾患でないか」。ベテラン内科医として直感した。外来は何とかできそうだったが、その週末に組まれていた待機当直には堪えられそうもなく、血液検査の結果を携え院長に相談した。

水曜は夕方の外来もあり、必死で乗り切ると、木曜は休みだった。水曜に再度採血

し検査結果を転送してもらったが、さらに悪化しており、死を意識した。「どんどん衰弱して、このまま死んでしまうのではないか。一刻も早く診断をつけ、治療しなくてはならない」。京都で同じく循環器内科医をしている息子に電話でSOSを出した。

家族に支えられ京大病院で確定診断

松下は1958年、和歌山市内で生を受けた。父は地方公務員で、母は専業主婦、2歳下の弟がいる。手指にハンディキャップを持って生まれたこともあって、母は松下を医師にしたいと考えていた。松下も、将来は何か人の役に立つ仕事をしたいと、県下トップの伝統校、県立桐蔭高校から医学部を目指した。現役での合格は叶わず、1年間京都で浪人生活を送った。

名古屋市立大学医学部に合格し、83年に卒業すると、母校の第1内科に入局した。大学病院の研修を終え、派遣された国立療養所恵那病院(当時)には循環器内科医がおらず、難しい症例を母校の検討会で相談するうち、循環器の魅力にはまった。治療により劇的に改善することから、大きなやり甲斐を得た。進化し普及し

63歳で希少な血管内リンパ腫を発症

つつあったカテーテル治療の手技を身に付けていった。

博士号を取得し、順調に循環器内科医としてのキャリアを積んだ。かつて同僚薬剤師だった妻との間には息子と娘に恵まれた。93年に35歳となり、愛知県立循環器呼吸器病センター(当時)に異動。一般診療に救急にとフル稼働した。とりわけ、循環器は救急患者が多い。また、「自主的に行う」研究活動も求められ、診療後にデータを収集するなど、十分な睡眠が取れない日々が続いた。「医師は忍耐力がすべて。どれだけ少ない睡眠で堪えられるかの勝負だ」。「働き方改革」という言葉もない時代、患者さんに万全の体調で向き合えないのは、申し訳ないと感じていた。

それ以上に、自分の疲弊の蓄積が深刻だった。若いレジデントがいれば指導がてら仕事をシェアすることができたが、1年ほどレジデントが来ない時期には、1人でこなさなくてはならない雑多な作業が積み重なった。家族と過ごす時間も取れず、燃え尽き、倒れる寸前で踏みとどまった。

2021年9月に始まった倦怠感は、その時以上だった。息子の助言もあり、10月8日金曜午前の外来を終えた後、近所の総合病院を受診することにした。病診連携室のスタッフは顔なじみで、親身に検査や診療の手はずを整えてくれた。

金曜の外来中、冷や汗が吹き出し、もはや続けられなくなった。早々に切り上げ、そのまま総合病院を受診した。血液検査、CTやMRIなどの画像検査を終えると、いったん帰宅。月曜から1週間入院して、骨髄生検を含む精密検査をした。

所見を総合すると、リンパ腫疑いと診断だった。「一刻も早く確定診断につなげ治療を始めた」。長らく肺がんを患っていた妻は17年に亡くなっており、それからの松下は、松下は一人暮らしで、頼みの綱は子どもたちだ。京大病院に勤める息子は、研修医時代の仲間たちとリモートの症例検討会を開いて危機を察し、早々に転院受診の段取りを付けてくれた。名古屋から京都は新幹線で35分弱だが、車内も横たわらざるを得ないほどだった。名古屋に嫁いだ娘は看護師資格を持ち、

岐阜で松下の介護や家事を手伝い、病院にも付き添ってくれた。

血液のがんと言えば、研修医時代、病棟の白血病患者を担当していた。当時は延命がせいぜい、良い思い出はない。しかし薬や治療が様変わりして、固形がん以上に薬物治療が効くようになっている。ただしリンパ腫には80近くもの病型があり、薬剤も経過も異なるので、見極めが必要だ。京大病院入院から1週間、皮膚生検で、「血管内リンパ腫」と確定診断が下った。希少で診断が困難なリンパ腫という。聞き慣れない病名だったが、やっと治療に進めることに何より安堵した。(敬称略)



(聞き手・構成)
ジャーナリスト

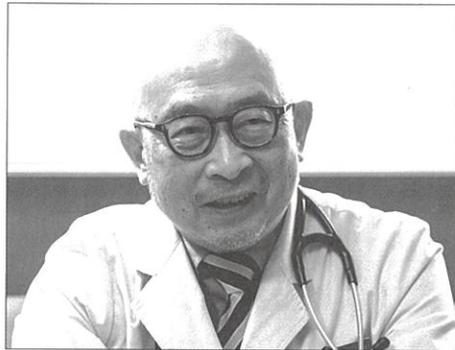
塚崎 朝子

第80回 医師が 患者になって 見えた事

63歳で希少な血管内リンパ腫を発症し、寛解に至って1年余りが過ぎた。職場にも復帰し、永らえた命で患者に寄り添いつつ、マイペースで人生を楽しんでいる。

8クルールの化学療法が奏功

2021年10月半ば、循環器内科医の松下は、息子が勤務する京都大学医学部附属病院の血液内科に入院した。1週間後には、血管内リンパ腫との確定診断が下った。



松下 豊顕(まつした・とよあき)
1958年和歌山県生まれ。83年名古屋市立大学医学部卒業、同第1内科入局。国立療養所恵那病院、愛知県立循環器呼吸器病センター、総合大雄会病院などを経て、2018年から現職。

翌日からすぐに、治療を開始することが決まった。80種類近くあるリンパ腫の中でも稀な疾患だが、B細胞由来のため、化学療法の「R-CHOP」というレジメンが有効だという。分子標的薬のリツキシマブ、シクロホスファミド、ドキシソルピシン、ビンクリスチンと4種類の抗がん剤に、ステロイドホルモン剤(プレドニゾロン)を組み合わせる。症例数が少ないた

め比較対照試験ができず、確立したエビデンスはないという。担当医から細胞バンクへの検体供与を依頼され、快諾した。

息子に治療内容を解説してもらい、自分でも調べた。息子も循環器内科医だが、松下が病気になるまで、診療の話はほとんどしなかった。論理的に話してくれる息子が、とても頼もしく思えた。

治療に至るまでの半月、松下の体調はどん底だった。尋常でない倦怠感に襲われ、仰向けのまま身動きが取れなかった。食事を取るのもきつくなり、辛うじて呼吸だけは保っていた。治療初日はプレドニゾロンだけを投与する。すると、寝返りも打てなかったのが、スッと体が軽くなった。「嘘のようにつらさが消え、地獄から生還した思いだった。ステロイドの威力を思い知った」

たちまち歩けるまでに回復したが、そこか

ら、副作用の大きい抗がん剤が待ち受けていた。支持療法と併用しつつ4剤を投与し、その後2週間体力の回復に努める。これを8クール繰り返す。経験したことのない、つらい副作用に見舞われたが、強く心に誓ったことがある。「医師として、希少な病気になった経験をきちんと書き残しておく義務がある」。

1クルールの入院中は、新型コロナウイルス感染症の強毒デルタ株が流行していた。

当初は息子が2、3度病室に顔を見せたが、その後は自粛して、主治や看護師以外の入室はなかった。家族との面会もガラス越し、洗濯物も病室の外で看護師に託された。孤独だが、回復を信じ落ち込むことはなかった。2クール目以降は外来で行うため、京都の息子の家に寄宿して通院した。身内とはいえ、病気で自由の利かない自分が迷惑をかけることには、申し

訳なさも感じた。

闘病記をブログとして執筆開始

退院すると、発症から初回治療までの日々について、頭の中の記憶を一気に掃き出し、パソコンに打ち込んだ。勤務先のクリニックのブログに闘病記を掲載してもらうようお願いした。それには、もう1つの重要な意味があった。瞬間に体調が悪化したので、患者たちに事情を説明できないままだったのだ。

「私の健康状態に関わる問題により、診療を長期間休止せざるを得なく……(中略)……再び勤務への復帰を目指し闘病中ではありますが、今日までの経緯をご報告……」と、患者に向け謝罪と経過報告の文書を作成した。ブログを始めると伝え、22年春の診療再開を願って結んだ。報告書は待合

室に貼り出され、それから定期的にブログに寄稿した。「直接伝えることはできなかったが、自分が頑張っていることを患者さんに知らせたかった」

2クール目の化学療法を終えると、12月半ばに岐阜の自宅に戻った。その後は、日曜の晩から息子の家に泊まり、月・火・水と3日間の投薬を終えると、岐阜に帰宅した。血管内リンパ腫は脳に転移しやすいため、予防的なメソトレキセートの脊髄腔内投与や入院での高用量点滴療法もあった。使った薬のうち、深紅の注射剤、ドキシソルピシン(アドリアマイシン)は、松下には懐かしい薬だった。1989年から2年間、名古屋大学環境医学研究所で研究に携わり、アドリアマイシンの心毒性を研究していた。その薬を自分が使うことになろうとは、何たる偶然か。6、7、8クール目ともなると、手足の痺れに悩まされ、筋力も落ちて手では字が書けなくなった。

2022年4月末、8クルールを完遂した。治療の甲斐あって、5月の半ばのPET-CTや血液検査で、寛解と判定された。大きな安堵感に包まれた。17年に亡くなった妻の仏壇に手を合わせ、真っ先に報告した。「仕事に

寛解で永らえた命は患者と自分のために

復帰して、患者さんとまた向き合えるかもしれない」。治療中の8カ月の間、代診医師を手当てしてもらったり、診療の負担をかけたりと、院長には迷惑をかけた。フルタイムの全面復帰は難しいが、体調と相談しながら、できる限り診療の場に戻りたいと思った。

足に後遺症が残るが診療に復帰

院長と相談の上、6月から週2回の勤務となった。それまで体力の回復に努めなくてはならない。妻が長らく肺がんで闘病しており、晩年は妻に代わり、2人分の食事を作るようになった。以来、レシピを見れば料理は自分でつくることができ、家事もすべてこなせるようになった。大好きなワインのグラスを傾ける、一人暮らしの穏やかな日常が戻ってきた。

3人の孫たちの成長は何より楽しみだ。ささやかな趣味は、病気の1年前から始めたバラ栽培。入院中は生け垣の手入れができなかったが、隣人が水やりをしてくれていたお蔭で枯れることもなく、季節ごとに花

を付けて和ませてくれる。

久しぶりの外来は緊張したが、なじみの患者たちは松下の復帰を喜び、「大変でしたね」と気遣ってくれる。中には悪性リンパ腫を経験した患者もいて、気兼ねなく患者体験を分かち合える。闘病を隠しだてせず、本当に良かったと思えた。

週2回の勤務は疲労もたまず、ほどよいペースだ。ただし、体調は完全に元通りとはいかなかった。両足の足首から下に知覚神経麻痺が残った。「自分の足で大地を踏みしめている実感がなく、義足を履いているようだ」

痛みや温度も分かりにくいので、けがや火傷には細心の注意を払っている。麻痺が強い左足は、つま先を上げることができず、スリッパを履くと脱げてしまう。病気の影響か、抗がん剤の副作用の末梢神経障害なのかは判然としなかった。京大病院に入院中からリハビリテーションを行っていた。寛解を得た後も違和感は消えず、根本治療もできないままである。幸い右足は動かせるので、車の運転に支障はないが、40代半ばまで趣味と

していた山登りができなくなったのは、心残りだ。とりわけ再発リスクが高いという2年間を用心しながら過ごし、その後も半年に一度のPET-CTによるフォローを継続している。人間はいつか必ず死ぬと悟り、死の恐怖は薄らいでいた。

「健康を失ってみて、健康であることすら意識せず送ってきた平凡な日常が、いかにありがたかったか。縁あって知り合った人には、病気も含めてつらい思いをせず幸せになってほしい」。心の底からそう願う。65歳になり、「自分の時間を大切にしながら、患者に還元する日々を続けたい」(敬称略)



〈聞き手・構成〉
ジャーナリスト

塚崎 朝子